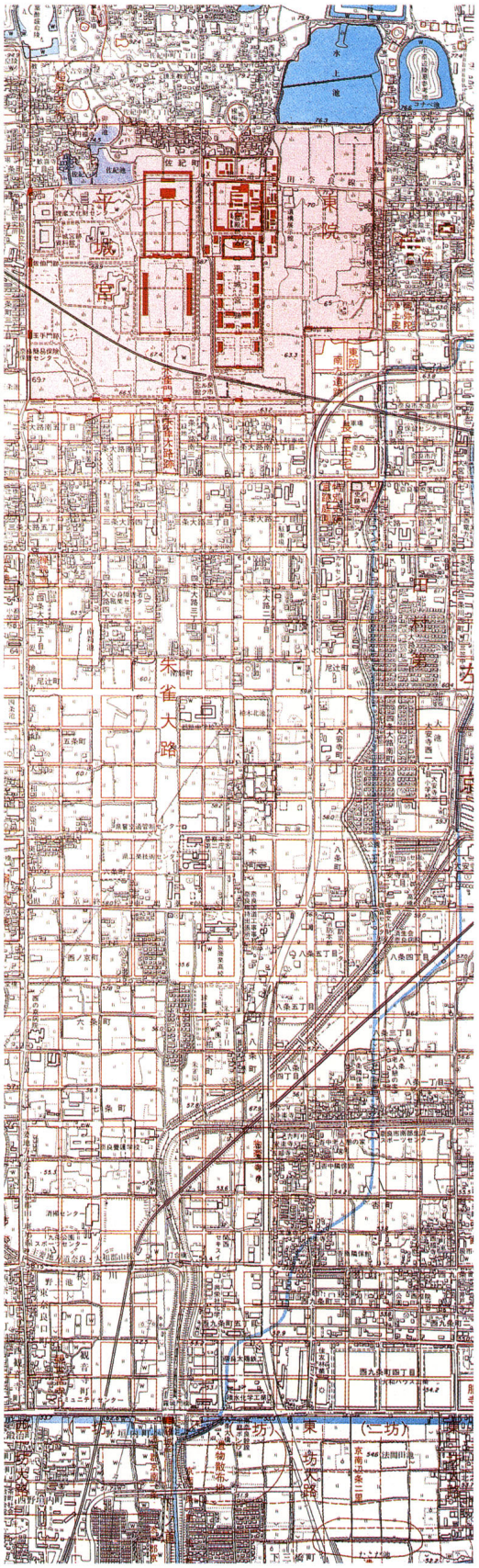
# 平城京朱雀大路跡

奈良市二条大路南三丁目 ／ 奈良時代 ／ 昭和59年(1984)5月7日指定

## Heijô-kyô Suzaku-ôji

8th c. ／ the central main avenue of the Ancient Nara Capital ／ Historic Site

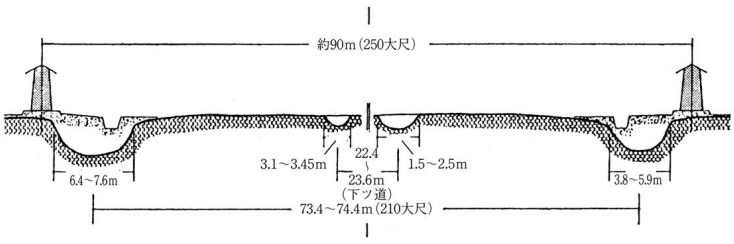



朱雀大路は、奈良の都平城京（710～784）のメインストリートです。南北約3.7km、路面幅約70mの規模で、都の正門である羅城門から平城宮の南正門の朱雀門までを一直線に結ぶ大路でした。現在、平城宮跡から大宮通りまでの南北約220m（幅約90m）の範囲を国の史跡に指定しています。

大路の名は、天皇の住まいのある平城宮南正面に位置する道路であることから、「朱雀門」と同じく、東西南北の四方向を守る四神（玄武・白虎・朱雀・青龍）の中で、南を守るとされる神「朱雀」から付けられました。この朱雀大路を基準に、碁盤の目に区切られた平城京の都市が計画されました。大路の東側を左京、西側を右京と呼んでいます。

朱雀門前の大路では、元日には儀式のために騎兵が整列し、また歌垣、雨乞いなどの行事も行われていたことが記録に残っています。

また、羅城門で出迎えた外国の使節を、この朱雀大路を通り、平城宮へと案内するため、朱雀大路は都の大路の中で最も大きく立派に造られていました。広い道路の両側には街路樹として柳が植えられ、広い道路の側溝と高く築かれた築地塀（坊垣）が延々と続く荘厳な景観は、奈良の都の象徴でした。




朱雀大路横断面模式図

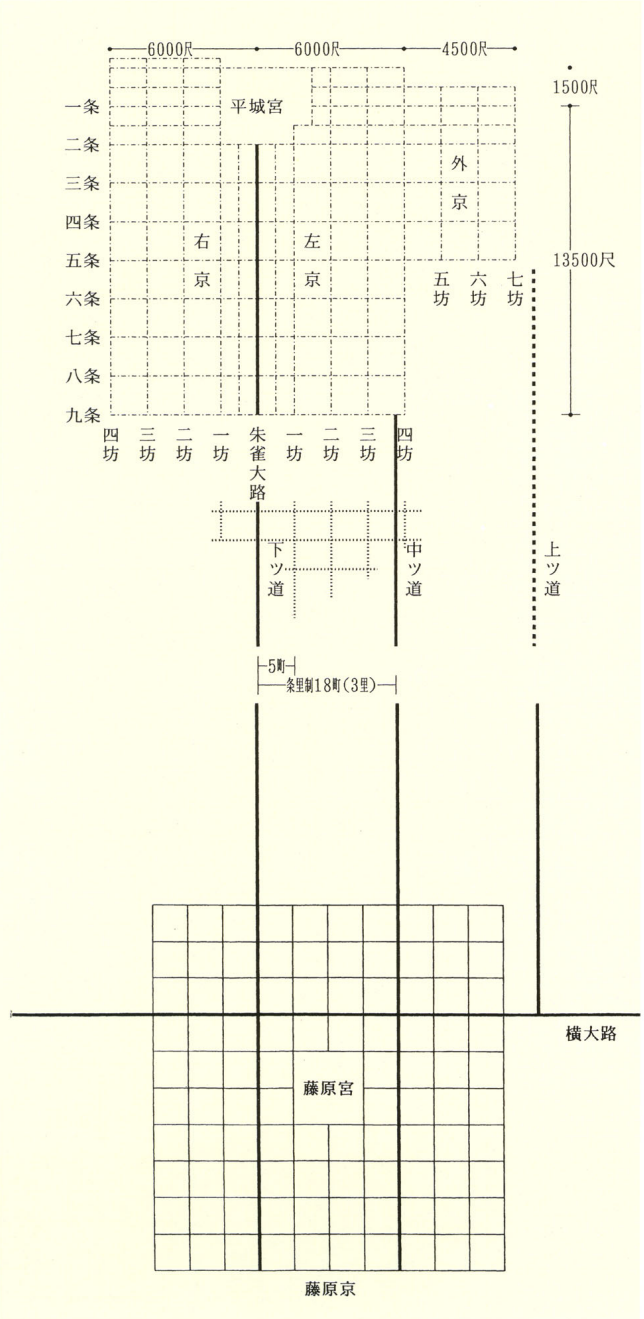
## ■ 平城京の都市計画 ■

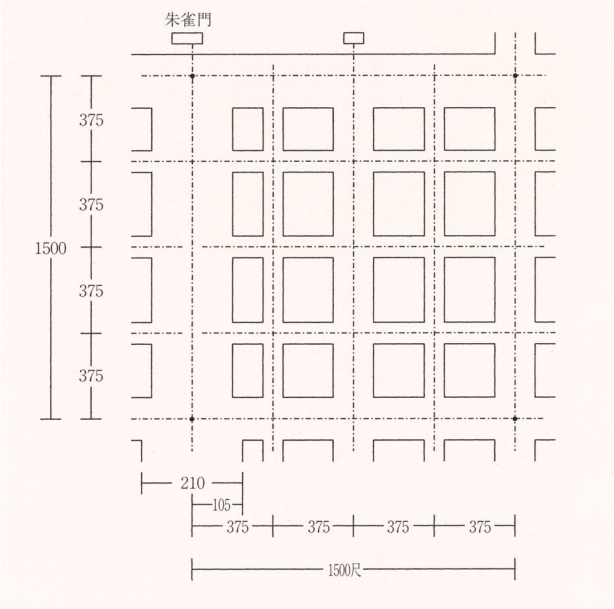
奈良に都がおかれる以前の大和盆地には、南北にまっすぐのびる３本の国道があり、東から上ツ道・中ツ道・下ツ道と呼ばれています。平城京はこのうちの下ツ道を基準として、ほぼ中ツ道までの間の距離を西に折り返す形に設計されたと考えられています。発掘調査により、朱雀大路の路面のほぼ中央で、下ツ道の遺構が発見されており、このことが裏付けられています。（復元整備している朱雀大路跡の真ん中付近に、芝生の植栽により約23mの幅で南北に表示している部分が、下ツ道の位置です。）

平城京の条坊は、下ツ道をもとにした朱雀大路の中軸線を基準として計画されました。まず、朱雀大路から東西に1500尺（令大尺：律令で定められた土地を測る基準尺、１尺＝約35.5cm）ごとに南北道路である坊大路の中軸線を定め、その間をさらに４分割することにより、375尺ごとに小路を造りました。南北についても朱雀門の前を東西に横切る二条大路を基準として、一条から九条までを同様に区切り、碁盤の目のように整然とした条坊を造っています。

発掘調査によって見つかった朱雀大路は、両側にある側溝の間が約74.5mありました。このことから、朱雀大路は中軸から東西105尺の距離に側溝を造る、側溝間210尺の規模の大路として計画されたものと考えることができます。

また、両築地塀（坊垣）間の距離を250尺（約90m）としていたことも発掘調査の結果からうかがえます。




### 奈良時代の尺度

平城京の造営が始まった頃には、長さの単位となる１尺に２種類の長さがありました。ひとつは１尺を約35.5cmとする令大尺、もうひとつは約29.6cmとする令小尺でした。これを平城京遷都後の和銅６年（713）には、唐の制度に合わせて統一することになりました。これまでの令小尺を大尺（唐大尺）とし、以後の長さの基準となりました。この基準尺がのちに「天平尺」と呼ばれています。

長年にわたる平城京の造営に、どちらの基準となる長さが用いられたのかについて、詳しく分からないところもありますが、天平尺を当てはめると、平城京の大路間の距離は1800尺で設計され、朱雀大路の規模を両側の側溝間が250尺となるように計画されたとも考えられます。